

カの2種だけになっているらしい事で結ばれている。第3項はハエで、第2次大戦後のハエ類の発生状況、ハエ類研究の概要、ゴミ処理場のハエの問題、家畜とハエ、山岳地帯のハエと垂直分布、都市化とハエ相の変化の6節で構成されていて、地球温暖化の影響と考えられる南方系のチョウ類の北進とは逆に、北方種であるホホアカクロバエ・クロキンバエが都市に進出していることは興味を引かれる。続いてシラミ、ノミ、トコジラミ、カメムシ、ドクガ、甲虫、ハチと比較的簡単な解説ある。次がブユとヌカカの解説で、都市及び観光地でのブユ問題と人の生活環境で発生するヌカカとが取り上げられている。次がアブでイヨシロオビアブと牧場のアブの2節の解説がある。室内塵のダニ及びツツガムシの項では、どちらも全く戦後の研究成果で、前者は住宅の気密化によるダニ刺痒症とダニによるゼンソクの増加が判明してからであるし、後者は米軍の医学研究所による調査研究に端を発している事にご存じであろう。後はクモ、サソリ、不快害虫の項で終わる。文献は巻末にまとめられているが、各項目に分けられていてなかなか便利である。(奥谷禎一)

藤田紘一郎：笑うカイチュウ A5, 206頁, 1994年9月 講談社刊, ¥1,500

少々古いが、今年入手したら既に16刷になっていて驚いた。人体寄生虫は家屋害虫とは無関係ではないので紹介しておく。著者は東京医科歯科大学教授で、熱帯医学と寄生虫学の第一人者である。本書は寄生虫に関する随筆集である。

5章からなり、まず第1章は“カイチュウ復活、知らぬ医師”と題し、人々の清潔志向から寄生虫を締め出したため、今日の医者が寄生虫症を知らぬことを問題としている。第2章では、“寄生虫が語る僕たちへの教訓”と題し、今日の花粉症やアトピーの元であるアレルギー問題が寄生虫にさらされない事が原因の一つであるとし、続いて彼等の性行動や考古学への貢献を語っている。第3章は、“ペットかわいや寄生虫は怖い”と題し、犬猫のカイチュウの卵が砂場で発見され問題になったことを取り上げ、人畜共通寄生虫病に気をつける必要を説いている。第4章は“家庭より、や

はり野におけ野生動物”と題し、アライグマカイチュウによる髄膜脳炎、エキノコックスとキタキツネ、サルの持つ赤痢アメーバ問題などが語られている。第5章は、“食のタブー忘れたグルメの罠”と題し、ドジョウとガッコウチュウの話、アニサキスなどのほか7種類の寄生虫の話が出てくる。特に82頁の「データを読む難しさ」では大いに教えられた。(奥谷禎一)

次の雑誌は新刊書ではないが、ちょっと纏まって知識が得られるので、紹介しておく。

遺伝1997年9月号(51巻9号)特集「天敵昆虫で作物をまもる」裳華房, ¥1,400

家屋害虫の防除も次第に薬剤に頼らない方法を考えなければならなくなっている。その時参考にしなくてはならない文献は、農業害虫での利用状況であろう。本特集では学術論文でなく6編の農業害虫の天敵利用の解説が掲載されているので、簡単に紹介しておく。

最初は九大農学部生物的防除研究施設の広瀬義躬氏によって“天敵昆虫で作物をまもる”と題し、天敵農薬としての天敵研究の歴史と現状が纏められている。第2編は北大農学部応用動物学教室の斉藤裕氏による“野菜をハダニからまもるチリカブリダニ”，第3編は農業環境技術研究所環境生物部の矢野栄二氏による“野菜・花をアザミウマからまもるヒメハナカメムシ”，第4編は高知大農学部暖地農学科の荒川良氏による“野菜をコナジラミからまもるツヤコバチ”で、この3編は具体的な利用の実体が示されている。第5編は“作物を害虫からまもるタマゴコバマゴコバチ”と題し、農業研究センター病害虫防除部の平井一男氏によってタマゴバチの増殖に、家屋害虫の利用のヒントが与えられている。終わりに纏めとして、京大農学研究科生態情報開発研究室の高林純示氏によって、“植物－害虫－天敵間の化学情報”と題し、天敵利用の新技术開発に向けての一断面である化学情報についての解説が述べられている。家屋害虫防除で物理的な方法と共に天敵も射程にいられておく必要がありそうに思われるので、関心ある方は一読しておくことを勧める。(奥谷禎一)